

# 民俗資料館だより

March 31<sup>st</sup>, 2021

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No. 28

加茂市民俗資料館  
館報 第28号

令和3年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

## 民俗資料館へようこそ

加茂市民俗資料館

館長 有本 幸雄

日頃より、皆様方には当民俗資料館をご利用いただきまして有り難うございます。

さて、昭和49年に旧下条中学校の校舎を転用し加茂市民俗資料館が開館した当時、私は小学生でした。学校から帰ると、たびたび資料館へ遊びに行っていました。お目当てはでっかい天狗のお面と飛行機の木製のプロペラでした。何度見ても飽きもせず、毎回、何分間もその場を離れなかった記憶があります。また、旧石器時代や縄文時代、弥生時代に興味を持っていたので、本物の土器や石器を展示していたコーナーも大好きでした。

一方、民具をまとって夕暮れ時の薄暗い教室にたずむマネキン人形たちがとても不気味に思えて、それらが展示してある一角は足早に通り過ぎていました。

現在の資料館は図書館として使っていた建物を転用し平成6年に移転開館しました。旧民俗資料館の時は8,000点ほどだった収蔵品は皆様方からのたくさんの寄贈品や寄託品、市内各地の遺跡調査で発掘された出土品等で今では20,000点を超えています。

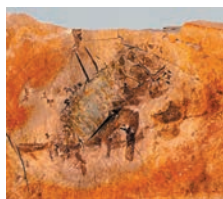
中学校の校舎を転用していた旧資料館と比べ、とてもコンパクトな規模の資料館になり常設展示できる資料は約1,200点と少なくなっています。そのため、以前は展示していた物も倉庫で保管せざるを得ない状況にあります。私の大好きな木製のプロペラもその中の一つです。

もし、「以前あった、あれはどこへ?」「もう一度、

あれ見たいのだけど。」という意見がございましたら、お気軽にお問い合わせください。

現在、資料館の第1展示室に、学名 *Gasterosteus kamoensis* (ガステロステウス カモエンシス) という魚類の化石を展示しております。七谷の下大谷地内の約990万年前に堆積した地層から出土した化石で、これまで確認されていない新種のイトヨであることが日本古生物学会英文誌で発表され、完模式標本(基準標本)として認定されました。和名は加茂の七谷に昔いたイトヨの意味から「カモナタニムカシイトヨ」と命名されました。

世界中で当館にしかない化石ですので、是非ともご覧いただきたいと思います。



(左側) イトヨの化石 (右側)

また、令和2年9月から11月まで下条の福島地内に所在する花立遺跡を発掘調査した結果、多量の土器類をはじめ多様な木製品が出土しました。その中でも木簡や剣形木製品は特に貴重な遺物です。今後、それらも資料館に展示できると思いますので楽しみにお待ちください。

これからも皆様方がお気軽に、加茂山公園の散策かたがた当資料館にご来館くださることを心よりお待ちしております。

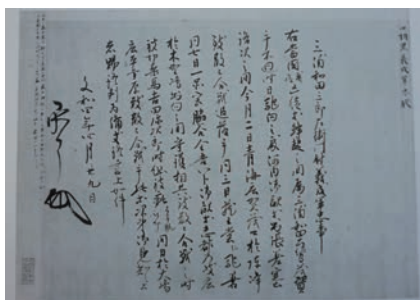
# 青海庄賀茂口陣峰

加茂市文化財調査審議委員

高橋 雅弘

南北朝時代の文和4(1355)年4月2日、奥山荘(現胎内市付近)に拠点をおく、<sup>なかじょうもちすけ</sup>中条茂資等の北朝軍勢が、「青海庄賀茂口陣峰」において菅名荘(現五泉市付近)に拠点を

置く南朝方の河内氏等と戦った(写真:史料①)。史料①は「確実な史料



「羽黒義成軍忠状」史料①

に見える最初の史料」であるが、14世紀中期には陣峰(以下「陣ヶ峰」と表記する)という地名がすでに存在していたことも明らかとなった(『加茂市史』資料編1)。

前記史料の「陣峰」は現在の陣ヶ峰と同一地区と考えられる。陣ヶ峰地区は加茂市域の出入り口にあたり、近世には三国街道の通過する交通の要衝地であったが、中世にはすでに、現在と同様の位置を占めていたことが伺える。ところで、陣ヶ峰の地名の由来はいかなるものであろう。「陣」とは「隊列。戦い。軍勢の駐屯する所、兵営、陣所」、「峰」は「山のいただき。山の頂上のとがったところ。ね」(いずれも小学館『日本国語大辞典』)を意味する。「ね」とは尾根の意である。「陣ヶ峰」とは「陣の所在した山」、則ち着陣や出陣が行われる軍勢の駐屯地などであり、要害の地であったと考えられる。

竹井英文氏は、陣は「繰り返し使われることも多く」、「街道の要地に立地することが多く」、城と同様に、「本格的な土塁や堀を設けた陣もあれば、ほとんど遺構が残らない陣もあり、実態はさまざまである」(リポジトリ『東北学院大学論集。歴史と文化』55

号)と説明している。付記すれば、要害、陣が領主によって恒常的に維持されるようになったのは、15世紀中頃からといわれる(齋藤慎一『中世東国の領域と城館』)。鎌倉時代から戦国前期まで陣や城郭は、あくまで戦乱の際に臨時的、一時的に利用される場所だったのである。

近世、近代に越後で編纂された地誌類に、「陣ヶ峰(峯)城」が掲載されている。陣ヶ峰城は「八幡村。加茂村ヨリ北八町二松原有。(『越後名寄』)」、「青海庄八幡村松林中二在。(『越後野志』)」、「山を擁し古き城地なれば段々の平坦を以て知る<sup>のみ</sup>而已。(『温古之栞』)」等と説明されている。上記の地誌類には、越後国内での多くの古城跡が掲載されている。城主や城歴などの記述の典拠は明らかではないが、大部分の古城跡は現地が比定されている。おそらく、これら地誌類が流布されていた当時、陣ヶ峰城跡とされる場所も、住民にはある程度認識されていたであろう。陣ヶ峰には臨時的な「陣」から恒久的な「城郭」に発展した遺構が存在した可能性がある。

陣ヶ峰の稲荷神社に、板書の文書が三枚所蔵されている。「上条村庄屋中沢太郎兵衛家の文書の中、陣ヶ峰に関係の深いもの一括して書き写し、陣ヶ峰の鎮守稲荷神社におさめたものであろう(古川信三「陣ヶ峰の稲荷神社と上条村新田」『加茂郷土誌』第五号)」とされている。文化2年に記したそのうちの1点に、陣ヶ峰の地名と稲荷神社の由来を説明しているものがある。

稲荷神社は「永正14(1517)年、御社



「陣ヶ峰 稲荷神社」

が焼失して以来再建無く、社地のみ荒れ残り、祭神も不明であったが、天文 22(1553) 年、輝虎公の使節として萩<sup>(ママ)</sup>田主馬の判官勝定が此の地に派遣され、稲荷大明神と崇め奉り社を再建した。神社はその後繁盛した。その後慶長 3(1598) 年、景勝公会津へ入国の際、訳が有って主馬は同行せず、越後を立退き、福井の松平越前守殿に仕えた。(以後略) (史料②)」とある。上杉謙信が、名のりを改めた年代、萩田を萩田としていることや、萩田主馬(1563~1642年)は実在の人物であるが、天文 22 年当時は誕生していないことなど、誤記が見られる。しかし編纂類ではあるが、皆無といってよい戦国期の陣ヶ峰の様相を記した文書として、参考にしたい。史料②からは、萩田氏の関連人物、又は上杉、長尾氏の家臣等が、陣ヶ峰の地に城を取立てると共に、城の鎮守社として稲荷大明神を再建した可能性も読み取れる。

陣ヶ峰、のちに陣ヶ峰城と呼称された可能性のある要害の場所とはどこであろうか。陣ヶ峰集落の最高地点(陣ヶ峰七番地)(以下 P 地点とする)に、現在二棟のアパートが建っている。この付近は、かつて稲荷山とか小山とよばれていた(『会報じんがみね第 5 号』)。なお、稲荷神社は明治 29 年頃に北越鉄道敷設に際し陣ヶ峰の P 地点付近に移転し、更に昭和 30 年代に旧地である現在地に戻った。陣ヶ峰城の主郭部とみられる P 地点から見た稲荷神社の位置は北東方面の鬼門に当たる。また、加茂中学校北側の市営住宅下にある沢(八幡沢)は、国道 403 号、JR 信越本線を越えた陣ヶ峰稲荷神社付近から形状が明瞭になり、深く幅広の堀状を呈して北西方面に向かい、

さらに田上町坂田の八幡宮の南側を通っている。

陣ヶ峰城の城域は、P 地点を主郭として、南方面の加茂警察署、加茂保育園を中心とした一帯と考えられる。北側は、八幡沢を天然の堀、南側は加茂保育園直下の整形された高い切岸(斜面)、東西は階段状地形にそれぞれ施工され、他は崖として断ち切られていて要害の地を形成している。城域と考えられる範囲は南北約 300 メートル、東西約 180 メートル、八幡沢の堀底から最も高台にあたる場所までの比高は約 18 メートルである(図 1)。

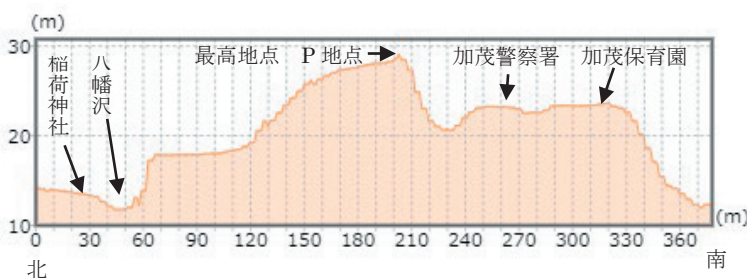
慶長 5(1600)年の越後一揆の戦いで、新発田の溝口秀勝軍が、一揆勢に包囲された三条城の支援に向かう際、陣ヶ峰において、かがり火をたき、間もない到着を三条勢に知らせた(『旧加茂市史』上巻)。『新発田市史』にも同様の記述は確認できるが、かがり火をたいた場所の具体的地名はない。『旧加茂市史』の典拠は不明

であるが、平野部に面した、最高地点の陣ヶ峰城跡と考え



られる場所などは、「P 地点から望む三条方面」三条方面への連絡に最適な立地条件といえる。

慶応 4(1868)年、戊辰戦争で米沢藩の軍務参謀に命ぜられた甘糟<sup>あまかすびんごつぐしげ</sup>備後継成は越後入国後、新発田藩士大野俊三郎や三条在住の三浦存吉という地勢に造詣<sup>ぞうけい</sup>の深い者に、本陣の適地を尋ねた。大野は加茂の明神山と田上の護摩堂を薦めたが、いずれも城郭の存在する要害の地である。さらに加茂に本陣を定めた際も、もし万が一の危急の場合は「宿から十余町離れた陣ヶ峰という山へ、本陣と同時に兵器・弾薬・資金等に移して戦いに備える」(『北越日記』『甘糟備後継成遺文』)こととした。おそらく「陣ヶ峰という山」は、城郭の地という認識をもつ大野、三浦などから示唆を受けての決定であろう。



「図 1 陣ヶ峰地区断面図〈縦横比 5 : 1〉」  
(国土地理院(電子国土 Web)利用)



# 青海神社ミュージアムへの誘い

加茂市文化財調査審議委員

泉 田 佑 子

## はじめに

「美術鑑賞の最大の楽しみ方」それは、いつ、どこに、なぜ存在するのかという文脈に乗っ取った美術品を、本来置かれた空間で楽しむ事であると私は考えています。今回は、明治五年(1872)に県社第一号に指定された青海神社の拝殿へ皆さまをご案内します。



明治天皇の加茂御巡幸の前年にあたる明治十年(1877)九月、拝殿の正面に3つの額が奉納されました。中央は「天垂博愛」の扁額で、その両脇は書画が交互に貼り交ぜられた3幅対の対額です。

ちょうど私たちは今、新型コロナウイルスのパンデミックにより全ての価値観が覆るような時代を生きていますが、明治十年頃はコレラが流行し西南戦争が起こるなど、現代にも通じるような激動の時代でした。

こうした時代を生き抜いた人々が、何を感じ、どう考えていたのかを拝殿の書画から想像し、現代を生き抜く心の励みとしていただくとともに、身近にある素晴らしい文化財の数々に触れるきっかけとなれば幸いです。

## 1. 青海神社拝殿正面額プロフィール

### ①中央額

- ◆内容：「天垂博愛」扁額
- ◆サイズ：額 1150x3000 mm
- ◆奉納年代：明治十年(1877)

◆奉納者：加茂町・古川伴吉郎。

明治十五年(1882)加茂町ではじめてつくられた金融類似会社「加茂会社」の発起人のひとりで、専務取締役。

◆書：宮小路康文(1800-1899)太宰府天満宮の社家六度寺の出身。菅公廟の社僧。比叡山で天台を修め大阿闍梨・大和尚に進むも還俗。平安遷都 1100 年記念祭には平安神宮「応天門」の扁額を揮毫した。

### ②右額

- ◆内容：山水画と書の貼り交ぜ額
- ◆サイズ：額 1150x2500 mm本紙 688x285 mm 6 幅
- ◆奉納年代：明治十年(1877)丁丑九月
- ◆奉納者：村松町・服部幾七。地主兼酒造業を営む。明治十八年(1885)設立の「村松会社」の頭取。



◆書：頼支峰(1822-1889)漢学者。「敵は本能寺にあり」で有名な『日本外史』の著者で漢学者、頼山陽の次男。支峰は、水原代官所の学問所「温故堂」に 1850 年、教授・講頭として招かれ 5 年間滞在。(『越後府と水原県』より)



▲冨取芳齋自画像

◆画：冨取芳齋(1808-1880)南画家。地蔵堂の大庄屋・冨取家の分家で酒造業と米穀問屋を営み、北越の名だたる豪商。祖父の良助は、良寛と三峰館(私塾)での同門。8歳で三条の五十嵐華亭の門に入り、後に京都で中林竹洞より山水画を学ぶ。

江戸で春木南湖・谷文晁らと交わり、その後長崎に遊学。三条の長谷川嵐溪とともに、越後では幕末の南画の双璧と称されている。(分水良寛資料館・渡辺憲館長の資料を参照)

### ③左額

- ◆内容、サイズ、奉納年代、作者は右額と同様。
- ◆奉納者：巻町・澤栗伊十。酒造業兼村役人を務めた澤栗家の五代目。

## 2. 拝殿の書画の世界

文人の書画とは、内なる強い思いの表れであり、画讃と言われる書の部分が付随することで、画境に広がりをもたらします。とはいえ、なかなか解説しきれない私に、古川洗宮司は次のようにおっしゃいました。

「学者は、こうした漢詩を言葉の通りに訳そうとしますが、詩を作る側の立場になったら、言いたいことは極めてシンプルなんじゃないでしょうか。要するにどうか？というくらいの、楽な気持ちで見た方がずっと楽しめますよ」と。



泉田：吹雪の中、隠居している高士を訪ねたようです。たいてい土産は書物と決まっていますね。

宮司：「迷っている時に智慧を授かった。ああ、ありがたい」という感謝の思いです。

#### D書) 題 ひせんきょうがん 飛泉怯巖図

万丈飛泉落 怯巖勢欲傾 瀑詩題石去 雲氣壁人生

泉田：芳齋がつけた飛泉怪石という画題を、支峰は飛泉怯巖と改題したようなんです。

宮司：いわゆる「想定外」ですね。あんまりすごいを見ちゃうと、もう人智では計れない。自然の凄さに圧倒されるわけです。畏敬の念が生まれる。

#### E書) 題 うごぼくせん 雨後瀑泉図

雨乞泉声急 楚重鳥語遥 帰途斜照裡 新漲没溪橋

宮司：「雨乞いが効きすぎたんだね(笑)」。空は晴れたけれども、帰り道の栈橋は沈んでしまった。

#### F書) 題 せいざんせいせい 夏山晴霽図

夏山如画図 翠靄残吾慮 残雨他峰去 晴虹江上孤

私：ひとりで虹を見上げていますね。

宮司：苦難を乗り越えた後には光が射すように「嵐が去り、明治の時代が来た」。

### おわりに

幕末から明治を迎えた時、最先端の思想家であった文人たち。ラストサムライの精神の宿るラスト文人の現代アートには新たな時代に戸惑いながらも、最後には希望の虹が掛かりました。

拝殿には、他にも同様の額が4つあり32作品が収められています。是非、先人たちの智慧を授かりに、青海神社ミュージアムへお出掛けください。

※拝殿へは、社務所に一声掛けてからお入りください。

※文中の白文は未完ですのでわかった方は教えてください。



#### A書) 題 きぎゅうすいてき 騎牛吹笛図

遂磬此源雨 歌草色残夕 虎踞下何固 子如牛背安

泉田：笛を吹き牛に乗る童子の画で、古くから南宗画や、十牛禅図にも見られる人気の画題ですね。

宮司：「明治が明けて色々あったけれど、ようやく安寧の時代となったなあ」という雰囲気でしょう。

#### B書) 題 しゅうこうほえい 秋江帆影図

江上萬帆斥 輪認煙霧孤 斯中最痛心 何処停若動

泉田：次は、なんでこんなに深刻なのでしょう？

宮司：あまりに開けすぎると、どうしたら良いかわからなくなりますからねえ。「明治が明けたけれど、迷うことが多くなったなあ。西洋文化をどう受け入れようか…どっちに進めば良いのだろうか…」

#### C書) 題 せつちゅうほういん 雪中訪隠図

笠檐風雪急 穿樹白沈沈 高人尋得花 是訪隠士家

## 令和2年度の歩み

### 1 入館者数《令和2年4月～令和3年3月》

	市内	市外	計(人)	団体
大人	298	569	867	3
中学生以下	358	70	428	14
計	656	639	1,295	17

### 2 資料収集の状況

本年度、下記の方から貴重な資料をご寄付頂きました。お礼申し上げます、紹介させていただきます。

〈寄贈(寄託)者名及び寄贈(寄託)品数等〉

宇田 道広 様(加茂市)	歴史資料	1点
坂上 欽二 様(加茂市)	歴史資料	3点
石附 初枝 様(加茂市)	歴史資料	2点
県央歴史研究所様(三条市)	考古資料	46点
斉藤 昌子 様(加茂市)	歴史資料	10点

### 3 レファレンス・サービス及びアンケート調査

レファレンス・サービス(72件)

(資料館への問い合わせの主なもの)

- ・宮寄上から出土した2万年前の出土品について  
⇒第2展示室の展示品を案内する。
- ・宮ノ浦古墳、福島古墳について  
⇒「加茂市史」資料編4をコピーする。
- ・加茂祭りの御神輿奉昇について  
⇒御神輿奉昇参加についての資料を送付する。
- ・五反田の移民碑について  
⇒「ふるさと歴史散歩」等関係部分をコピーする。
- ・大正時代の上条村の町並みの地図について  
⇒明治4年頃の町並みの地図を提示する。
- ・昭和30年頃の加茂市の地形図について  
⇒昭和40年頃の地形図をコピーする。
- ・長福寺について  
⇒「加茂郷土史17・30号」をコピーする。  
現地へ案内する。
- ・木製プロペラについて  
⇒市民体育館収蔵庫保管の木製プロペラを案内する。
- ・加茂市で石川雲蝶の作品について  
⇒「加茂市史」文化財編の「十二神社」をコピーする。

### 来館者の声

- ・電話機、蓄音機、農家・商家の器具が懐かしい。
- ・箆笥づくりの工具が充実していた。
- ・天狗面を見て、昭和55年の式年祭のお祭りに踊りに出演したことを思い出しました。(お嫁に来て)
- ・漢方薬の本の展示物に興味をもちました。貴重なものを見せていただきました。
- ・子どもたちは、加茂地域の昔の暮らし方により興味をもつことができました。また、道具のよさや昔の人々がいろいろな道具を使い、工夫して生活していたことに気付くこともできました。

### 4 社会科出張授業

期日 令和2年7月17日 下条小6年生

「加茂市出土の遺跡について」

期日 令和2年11月6日 下条小6年生

「花立遺跡の発掘調査現場の見学」

### 5 花立遺跡現地説明会

期日 令和2年11月14日

参加者 178名(市外111名 市内67名)

## 令和3年度の事業予定

### 1 社会科出張授業

- ・対象 小学校6年生～高校生(希望する学校)

### 2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期日 第1回 令和3年8月19日(木)

第2回 令和3年11月24日(水)

時間 午前10時～11時30分

午後2時～3時30分

会場 加茂市立図書館 視聴覚室

内容 絵画「昔を偲ぶ加茂の風景」・映写

### 3 古文書講座

第1回 9月7日(火) 講師未定

第2回 9月14日(火) 講師未定

第3回 9月21日(火) 講師未定

時間 午後7時～8時40分(1～3回とも)

場 加茂市公民館 第1研修室

内容 未定

### 4 歴史講演会

日時 令和3年11月の土曜日

時間 午後2時～4時

会場及び講師 未定

### 5 特別歴史講演会

期日 未定

会場及び講師 未定

※ なお今後の新型コロナウイルスの感染拡大の状況等によって、中止等の決定がありましたら、速やかにお知らせいたします。



## 令和2年度遺跡発掘調査について

本年の遺跡調査は、2遺跡を対象とした確認調査と1遺跡で本調査が行われた。いずれも下条地内に存在する遺跡である。



調査遺跡位置図

### 確認調査

#### 1 花立遺跡—古代—

調査地 加茂市下条地内

調査期間 令和2年4月21日・22日

調査原因 道路建設工事

調査面積 約54m<sup>2</sup>

調査の概要 調査対象地は昨年度確認調査を実施した区域の南西側に延びる法線内である。10か所にトレンチを設け、土層堆積や遺構・遺物について調査を行った。番号は昨年度からの連番とした。

8トレンチから柱穴や土坑、11トレンチから柱根が確認され、集落の拡がり把握できた。また、9・10トレンチでは砂質土や砂利層が確認でき、河川の覆土と考えられる。遺物は7～15トレンチから平安時代の土師器・須恵器が出土した。この他に、少量の木製品と縄文土器1点が出土した。

この結果を受けて、古代の集落跡が確認された1～12トレンチ帯について本調査が必要と判断した。本年度の発掘調査は9～14トレンチを設定した区域を対象として実施した。



花立遺跡 8トレンチ



花立遺跡 11トレンチ



花立遺跡 11トレンチ出土遺物（柱根）

#### 2 鬼倉遺跡—古代—

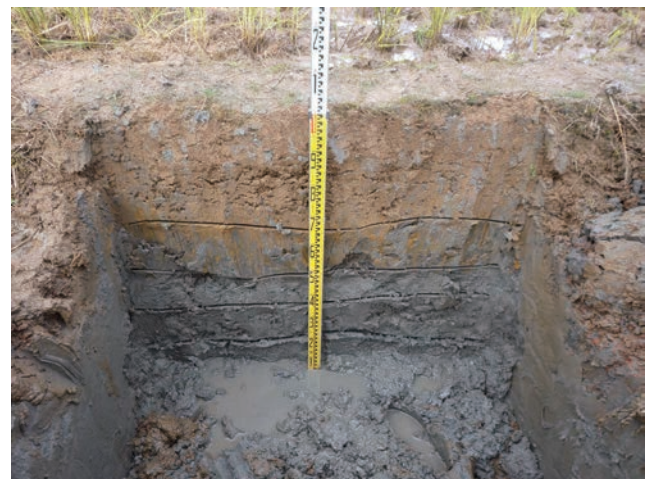
調査地 加茂市下条地内

調査期間 令和2年12月4日

調査原因 農業用排水路改良工事

調査面積 約7m<sup>2</sup>

調査の概要 6か所にトレンチを調査したが、砂質土や腐植物層が堆積し、地山面を把握できなかった。河川の流路内または付近一帯が低湿な環境にあったことが推定される。



鬼倉遺跡 2トレンチ



## 本調査

### 1 花立遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市下条字福島地内

調査期間 令和2年9月23日～11月18日

調査原因 道路建設工事

調査面積 約914㎡

調査の概要 花立遺跡は平成5年に周知化された。遺跡は下条川左岸で丘陵縁辺の微高地に位置する。現況は水田で地表面の標高は1.3m前後である。

調査区から掘立柱建物1棟、南北方向に流れる河川1・2と東西方向に流れる河川3の合計3本の流路が確認された(写真1)。建物は河川2と3に囲まれた区域に位置し、規模は2間×3間、平面積約18㎡である(写真2)。建物の南から東側にかけて細い溝が巡る。柱穴の中には、柱根が見られるものがある。建物の主軸は南北を指向しており、河川1・2と向きを同じくすることから意識的に向きを揃えた可能性がある。

河川からは多量の遺物が出土した。平安時代の土師器・須恵器を中心とし、多様な木製品がある。須恵器は大半が佐渡小泊窯産で、9世紀代のものである。土器の底や体部外面に墨や漆で文字・記号が記されたものが目立ち、「大」・「上」・「主」・「山」などと読める。木製品は木簡1点、剣形木製品(長さ約54.5cm×幅約4.5cm)(写真3)、斎串、箸、曲物、皿、柄杓(瓢箪)が出土した。その他、土錘、石製の紡錘車が各1点ある。また、少量ながら古墳時代前期の古式土師器や縄文土器なども出土した。

整理作業はこれからであるが、河川から出土した平安時代の墨書土器や多様な木製品から祈りや儀式が水辺で行われたことが想像される。そこには付近一帯の開発を先導した有力者の関与が推測される。

(伊藤秀和)

### 編集後記

新しく加茂市文化財審議委員になられた高橋先生、泉田先生より玉稿をいただきました。ご多用のなか本当にありがとうございました。

陣ヶ峰の地は戦乱の際に要害の地として重要な役割を果たしてきたことがわかりました。稻荷神社、今も陣ヶ峰の人たちによって尊敬され、手厚く護られています。

青海神社にはたくさん文化財があります。お二人の語りによって、難しい絵や文字の意味が解っていくストーリー性あるお話に引き込まれてしまいます。美術作品として存在している素晴らしさを感じます。

皆さん、足を運んでみてはいかがでしょうか。



写真1 調査区全景



写真2 掘立柱建物跡



写真3 剣形木製品出土状況

## 加茂市民俗資料館

- 開館時間 9:00～17:00
  - 休館日 月曜日、毎月第1,3,5土日曜日 祝日、年末年始
- ※ 但し、4,5月は月曜日のみ(祝日に当たるときは次の平日)
- 〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地1  
TEL / FAX: 0256-52-0089  
E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp  
<http://www.city.niigata.jp/section/minzoku>  
※創刊号～第27号はWeb上で見られます。